

釣れ釣れなるままに

2009年思い出の釣行記 PART. 7

チヤウダー(チガウダー)



鹿島釣狂

岩見沢釣遊会第6回大会

☆開催日	平成21年10月18日
☆開催場所	庶野港～美幌川
☆入釣場所	オリコマナイ
☆釣果	カジカ 425 mm 3/6
	アブラコ 420 mm 2/2
	ハゴトコ 4/7
	クロガシラ 1/1
	ソイ 0/1
	重量 520 0 g
☆成績	合計点数 1365 点 (2魚種身長+10匹重量)
	優勝

釣り談義に花が咲く

第5回大会で年間優勝を決めたかったところだが、嵐氏、吉井氏がピタリと後をつけてきており、余裕のある釣りはできないようだ。今回は交縁会との合同大会で、2魚種身長+10匹重量制の審査方法なので、音調津漁港でアカハラをとり、その先のオリコマナイで根物を狙うつもりである。

そのアカハラのためにゴロを80本用意し、前回残したゴロ10本をコマセの中に練り込んだ。アカハラ釣りの極意は前回の大会で仲間から学んだ。そのために4.5mの3号磯竿を1本だけ新規購入してみた。また、再構築をせまられた仕掛にも一工夫を施してみる。その仕掛に封を切ったばかりのハリを結んでいるとハリ先が曲がっていることに気がついた。ハリ先を指の腹に軽く押し当てると滑ってしまうのだ。商品名は差し控えるが、これからは新品といえども気をつけなければならないと思う。さらに、アカハラがたくさん釣れたときのためにフラシを用意した。9匹揃えた後は小さなアカハラをリリースしなければならない状況をも考えてのことだ。

生命とは何だろう。その残り時間を意識したときに生命に対する愛おしい思いが深まるというけれど、益々その問いの答えに窮するようになってきた。吉川英治は大岡越前に「ひとの生命を愛せない者に、自分の生命を愛せるわけがない」と語らせている。自分の生命は全ての生き物と同じように永遠のものではないけれど、地球の永い歴史の中で今ここにいる自分の不思議さを思う。釣りという行為で殺生を繰り返す罪深さを感じているが、その行為をやめようとはしない。言い訳を凝らしてみようとするがなかなかうまくいかない。ゲーテは「生の喜びは大きいけれど、自覚ある生の喜びはさらに大きい」と言う。フラシを用意することで「自覚ある生命」と必死に取り繕っている次第である。

現在、定年退職を控えて住宅のリフォームをしているところだ。家主のいない状態が10年以上も続いていて室内換気ができず、内壁のクロスがシミを作りながら黒ずんでいる

のだ。ついでに自分の行く末を考え、キッチンや風呂、階段も年寄世帯用バリアフリーのものに取り替えることとなった。

大会出発日、今後のリフォーム日程について大工さんと詰めていると、彼は来週の土曜日はヘラブナ釣り大会のために体が空かないという。そして、この私も今日これから釣り大会に出かけるということで、お互いに釣りを趣味としていることに意気投合して釣り談義が始まった。さらに、キッチンを依頼している業者にも来てもらうことになったのだが、その彼も釣りが一番の趣味だという。最近はクロガシラやシャケを求めて苫小牧方面に出没を繰り返しているらしい。「3人集まれば何とやら」でリフォームの話から逸れてお互いの釣り自慢に花が咲いた。

時計を見ると出発の時刻がせまってきたおり、リフォームと釣り自慢は一旦棚上げにして集合場所へと向かった。バスの中で交縁会大会実行委員長あいさつや審査委員長の説明、団体戦の抽選を終えて恒例の宴会が始まった。

過去の9月の大会では、まず音調津や目黒・庶野漁港でアカハラを揃えた後、カジカやアブラコをもゲットして入賞してきたパターンが多かった。仲間が北海道名人会の金井氏に聞いた話によると10月のアカハラは大変厳しい状況にあるらしく、それを聞いた何人かは漁港を敬遠してしまった。私は音調津漁港に迷いはないのだが……。

音調津漁港

バスは軽快に天馬街道を抜けて23:30には音調津漁港に着いてしまった。ここで下りるのは私一人だ。漁港内はアクビをしているかのようにノッペリとしている。防波堤に付いた街路灯がオレンジの光を海面に落とし、その光に群がったアミを食べに1羽のカモメがゆったりと泳いでいた。光から少し離れたところで竿3本を出す。しかし、竿までノッパリとして私までアクビが出て来そうになる。さらに、追い打ちをかけるように、雷光が轟き土砂降りとなる。

まだ1時間もたっていない頃、目黒漁港に入った前野氏からの携帯が鳴る。「どうだ？釣れているか」「さっぱり」「こっちもだ。やっぱり港のアカハラは駄目なようだな。外海の波はどうだ」「私も港の中なので、分からない。あと1時間ほど粘って駄目だったら場所を移動しようと思う」

ゴロが早く抜けるようにと竿を煽っている途中でグッと重みが乗った。3号の磯竿だったために中々の抵抗感である。上がってきたのは30cm弱のクロガシラだった。フラシに入れて海中にぶら下げる。アカハラ仕掛はさっぱりで、カンカイでもとイソメをつけて2本バリ遊動仕掛を港の出口目指して遠投する。それによいアタリが出てソイが来たが小モノである。その後はやっぱりノッペリと静まりかえってしまったので移動を決意する。

午前3時、漁港脇を流れる音調津川河口に向かう。釣り場案内地図ではクロガシラやタカノハのマークが記されている。キャストに荷物を積んで河口を見ると、ここもやっぱりノッペリとしており魚が釣れる気配は感じない。オリコマナイ覆道前からは釣り人のへ

ッドランプの灯りがチラチラと届いてくるが、一応、河口で竿を出すことにした。しかし、ここでも時間だけが過ぎていき一向にアタリがでない。仕方がないのでオリコマナイ方向に再度移動しようと荷物を片付け始めた時、ガクンと竿尻が持ち上がるアタリが出た。今日初めての大物の感触を味わい手にしたのは、45cmバツカンに丁度収まる大きさのカジカだ。これでようやく3匹である。

オリコマナイ

山並みの稜線がぼんやりとしてきた午前5時に再度移動する。キャスターに荷を積みこみオリコマナイ覆道に向かって黙々と歩く。覆道前では釣り人3名がほどよい間隔で釣りをしていたが丁度片付け始めたようだ。覆道脇に付いたテラスの降り口階段下は波がかなり高く、そこに陣取っていた清鱗会2名も移動するところだった。釣果を聞いても「さっぱり駄目だ」とのことだったが、私は行く当てもないので覆道裏の狭い砂利原で竿を立てた。



オリコマナイはカジカ波としては大きすぎた

カジカ波としては大きすぎるが、カジカ仕掛を近投、アブラコ仕掛を中投、タカノハ仕掛を遠投する。ハゴトコが釣れた。カジカも釣れた。どの竿にもアタリはひっきりなしにあるのだが今度は小物ばかりに悩まされる。それでもなんとか10匹は揃えることが出来

た。

隠れ根で仕掛は随分とられたが、遠投しているタカノハ仕掛には根掛かりがない。ハリスに着いた発泡スチロールがハリを浮かせて根掛かりを防いでくれているのだと思う。それにアブラコ33cmがきた。クロガシラに替わってこれが嫁になってしまうのだろうか……。小物ばかりなので100mほど右で竿を出している先行者のところに様子を見に行く。彼は40cm程のアブラコ4本をフラシの中に入れていた。どうも移動した後に遠投で釣ったようだ。

午前8時、釣り場に戻って新しいエサをつけて竿3本とも遠投にする。その竿に昆布の揺れとは違う明確なアタリが出た。いい突っ込みをみせて、アブラコ40cm強が上がった。これはタカノハ仕掛につけた2cmほどの発泡スチロールをもがっぷりと呑み込んでいた。残された時間はあとわずかだが他の2本の竿もタカノハ仕掛に変えてみる。しかし、その後はハゴトコのみだった。本日は9時上がりなので慌てて片付けて覆道を抜けたところでバスを待った。10匹中2本の大物だけでは芳しい成績を収められないだろう。

胸算用

本日を振り返ってみれば音調津漁港で打ち拉がれ、音調津川河口のカジカ1匹で望みをつなぎ、オリコマナイの海況に難産を覚悟させられ、せめて団体戦の足を引っ張らないようにと最後まで粘り続けた。そして40cm強のアブラコがきた時点で無様な負け方だけは避けることができたと胸を撫で下ろすことができたのだ。

類似の車屋ラーメンで審査をした。大アブラコ9本にカジカを揃えた岩本氏は別格だが、それに続く者は思いの外大接戦の模様である。提出された魚を見ながらパチパチと胸算用をはじめしてみる。仲俣40+40+5kg、前野氏50+30+5kg、嵐氏40+30+6kgで3人が似たような点数なのだ。

表彰式では、4位の賞品を受け取った。釣遊会では3位の成績である。年間では捨て点にしたかった6点がマイナスされ3点がプラスされた。5回計では8点(①6①②①③)となり、来月の大会を待たずして私の年間優勝が決まった。

身長優勝 小野田正男氏 アブラコ47.5cm 魚の持ち方にも優しさが溢れています





大物は2本だけだったがこの2本で年間優勝を決めた。嵐氏「脱帽です」



総合優勝 岩本 満氏「こんなアブラコ9本で優勝しました。大カジカも出しますか？」
準優勝 前野達志氏「このカジカが効きました」

チャウダー

私は審査に出して持ち帰った魚はどんな小さなものであっても調理するように心がけている。女房の胸算用では、本日の成績と共に魚を披露した時点でカジカ汁とアブラコの煮付けと決めていたらしい。私が魚を捌いた後、野菜を取り出しながら「魚は何に調理しますか?」と尋ねられたので、「カジカは唐揚げにしてくれ」と答えた。カジカの弾力のある肉はどうも唐揚げに似合っているように思えるのだ。そうしてビールの横に並べられたカジカのザンギ風唐揚げは絶品だった。「アブラコなどの他のものはどうしますか」ときたから「煮付けでいい」と応えた。煮付けには量が多すぎるようだ。「他にするものはありますか」と再度聞いてくる。

「シャケチャウダー」の一件を皆さんにお話したのだろうか。釣ってきたシャケを捌いていると、「シャケはなんにしますか」と聞かれて「チャウダー」と返事したのだが、一向にチャウダーにならなかったのだ。今回も「チャウダー」とだけ言ってみた。思った通り女房の料理の思考は一向に変化していなかった。やっぱりチャウダーにはならず全部が煮付けになった。さっと湯通ししてからポン酢でいただくと思っていたカジカの肝も一緒に煮付けにされていた。クロガシラはもちろん女房の大好きな煮付けであった。

【シャケのチャウダーはおあずけ（2006/10/1）】

帰宅後、「釣一りんぐ北海道」を見ながら微睡む。買い物から帰ってきた女房に「シャケの頭は鍋用に、白子は天ぷら用に、シャケの尾鰭側の半身はちゃんちゃん焼き用に切ったけど後はどうしたらいい?」と聞いてみる。すると、「あなたはどんな料理にしてほしいの?」と返してくる。「釣一りんぐ北海道」では白老でのシャケ釣りを放映し、工藤準樹さんに1本掛かった。それを三好リサちゃんがチャウダーやロールキャベツ風煮込みにしていたことを話した。すると、「チャウダーはアサリの身を使うのよ。どのように作るのか教えて」ときたもんだ。

番組では「チャウダーはベーコンや貝の代わりにシャケの身をサイコロ状に切って」「本来なら生クリームか牛乳を入れるところを、魚肉や具の豆腐に合わせて、豆乳を入れる」「ロールキャベツ風は、皮を引いたシャケの身とベーコンをキャベツの替わりの白菜で巻く。」「白菜は塩を入れた熱湯に湯通ししたものを氷水で冷やすとシャキシャキ感が残って美味しい。」と解説していたが、それをいちいち伝えるのが面倒で口ごもる。そして、「任せる」とだけ言った。

魚を捌きながら「皮を引いた方がいいか?」と一応聞いてみたが、結局その必要はなく、今日もチャンチャン焼きになるらしい。そして「前は、チャンチャン焼きの味が塩辛かったので、今回は白滝を入れてみる」と独り言を言っている。「あなたはどんな料理にしてほしいの?」と聞いてきたのはどのような意味があったのかいまだに謎である。

年間優勝も決めたことだし来月はアカハラなんぞ、いやアブラコ、カジカなんぞ狙わずに、女房が喜ぶカレイのみを狙って釣りをしようと思う。大会だと順位にこだわってしまい、本来の釣りの楽しみを忘れてしまっている帰来がある。1発大物だけを狙ってノンビ

リと竿を出すのもよいだろう。

【追記】

再びチャウダー（違うだー）

帰りのバスの中で釣遊会の成績の記録のために、個票が後ろの座席から手渡しされて大前事務局長に届く予定だった。途中、嵐氏はその個票を手にしたところから成績の間違いに気がついたのだ。隣にいた私もそれを目にすることになり、釣遊会では私が1位の成績だったことが判明した。交縁会では参加点として200点が付加されるのだが、私のところだけが加算し忘れていたのだ。嵐氏は私の後ろに座った村岸交縁会会長に報告して成績が修正された。知らぬが仏の前野師匠は釣遊会優勝の余韻に浸って深い眠りについていた。

審査結果

優 勝	岩本 満	1 6 4 3 点	(アブラコ450mm+カジカ 233mm+7600g)	サルル
準優勝	鹿島釣狂	1 5 6 5 点	(カジカ 425mm+アブラコ420mm+5200g)	音調津
3 位	前野達志	1 4 7 9 点	(カジカ 460mm+アブラコ349mm+4700g)	目黒
4 位	嵐 光博	1 3 1 2 点	(アブラコ397mm+カジカ 295mm+5200g)	美幌
5 位	村岸省三	1 0 5 5 点	(アブラコ343mm+コマイ 342mm+1700g)	目黒
身長優勝	小野田正男	4 7 . 5 cm	(アブラコ)	オリコマナイ